



みやぎの明治村 とよま資料館だより

登米市歴史資料館・高倉勝子美術館
発行/㈱とよま振興公社
〒987-0702
宮城県登米市登米町寺池桜小路2
Tel: 0220-52-5566
Fax: 0220-52-2630
http://toyoma.co.jp
発行日: 令和3年4月 日



◀ 登米町伝統芸能伝承館 ▶ 第4号

// 序章「なぜ登米に能が伝承されているの?」 //

武家の式楽として演じられていた能が、広く登米町民に伝承されることになったのは、明治維新の頃に遡ります。

仙台藩は戊辰戦争で奥羽越列藩同盟を結び、新政府と対決することになりました。しかし、仙台藩は新政府に負けてしまいました。

この時、登米伊達家の当主であった伊達邦教は家臣全員に農家に帰農するよう、8,000石※の農地を配分しています。この帰農政策によって、武士が農民となり、登米町民に能が伝承される、大きな転換点となりました。

※印について、裏面の「チョット一息」で説明します。



写真1: 薪能「春日龍神」(平成30年9月15日)

// 「帰農が能の伝承とどのような関りがあるの?」 //

江戸時代、武家の式楽として能は重視され、仙台藩においても、手厚い庇護と奨励を受けていました。仙台藩では、喜多流と金春流が取り入れられ、特異な流派の金春大蔵流が盛んに演能されました。

明治維新の廃藩置県により、登米伊達家では帰農した武士によって、一般町民にまで広く普及することになりましたので、登米町には宮城県内で唯一、旧藩以来の独特の能が地域に根差しました。

同じ仙台伊達家家臣であった角田、亘理、岩出山、船岡及び白石の邑主は、武士の身分を残して北海道に移住をするか、帰農するか選択を迫られました。結果、5家の邑主は北海道移住を決断しましたので、地元で能が伝承されることはありませんでした。

明治11年頃、旧藩士を中心に親睦社が創設され、明治41年に登米謡曲会が結成されました。一時衰退の危機もありましたが、危機を乗り越え、登米独自の能と狂言を今に継承しています。

町民に広く継承されてきたことから、日常生活の中で、婚礼や住居の上棟式などの際に、能楽の礼儀・作法の影響を受けた慣習が今も色濃く残っています。

✎ 能一口メモ

能は日本の伝統芸能の一分野で、能と狂言の違いは下記のとおりです。
能→歌舞劇(人間の悲しみや怒り、懐旧の情や恋慕の想いを描いた芸)
狂言→科白劇(笑いの面を持ち洗練してきた芸)

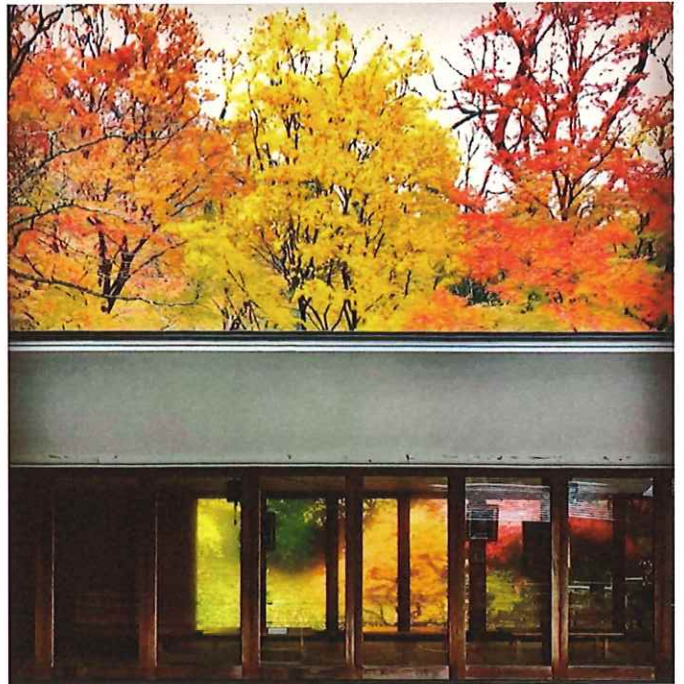


写真2: 舞台から見た見所

裏面もご覧ください



写真3 舞台の全容
森舞台建築に関わった隈研吾氏と千住博氏

平成8年当時、お二人は40歳前後で、新進気鋭の時期を迎えていました。

登米町の伝統芸能の拠点となる伝統芸能伝承館の鏡板の絵を誰に描いてもらうかというときに、隈研吾氏から推薦を頂いたのが、千住博氏でした。今から、25年も前のことです。完成後のお二人のコメントが残されています。(抜粋)

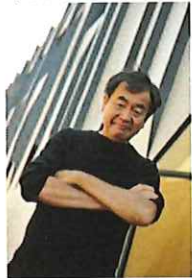


写真4 隈研吾氏
写真提供：隈研吾建築都市設計事務所
<http://kkaa.co.jp/about/kengokuma/>

能は、そもそも大自然の中で演じられるものであった。
全ての空間は、森に向かって開放され、そして、登米町の人々に、能を愛する全ての人々に対して、開放されている。
この建築を通じて「開かれた文化施設」の一つのプロトタイプを掲示したいと思った。
✎プロトタイプ：原型、手本
※平成9年、森舞台の設計で日本建築学会作品賞を受賞

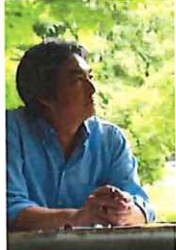


写真5 千住博氏
撮影：山口和也氏

能舞台の壁画制作に奇をてらうことなく、真正面から挑んだ。使った絵具は、全て天然の岩絵の具であった。
若竹は全て天然群青で描いた。青は若さに通じる青である。松が虚実の美であるのに対し、竹は虚を表している。
日本文化の奥行の深いダイナミズムを一人でも多くの方々に感じていただきたい。
※ダイナミズム：そのものが持つ力強さ、迫力

登米町伝統芸能伝承館(森舞台)建設の経緯

昭和60年頃までの謡曲会の活動は、年に一度の秋祭りの宵祭に、神社での奉納が主なものでしたが、昭和60年から実施されたみやぎ明治村事業により、観光客の方々の入り込み数が多くなってきました。入り込み数が増加することに合わせて、登米能への関心も高まってきました。このような状況もあいまって、謡曲会から能楽堂の建設の要望が出されるようになっていました。

平成4年12月、現地(鉄砲鍛冶の屋敷)を所有していた方から、土地の寄贈の申し出があり、現地の雰囲気能楽堂に合うということで、建設に向けて進められることになり、平成7年4月、株式会社隈研吾建築都市設計事務所と実施設計契約を結びました。工事は同年10月から始まり、翌8年6月に完成しました。

この能舞台の建設に当たって、設計は隈研吾建築都市設計事務所ですが、この他に鏡板に描かれている老松と若竹を描いた画家は、日本画家の千住博氏です。このお二人は、今や世界的にも有名になっています。

森の中に佇む能舞台としてだけでなく、お二人の合作を見ることのできる場所としても、貴重な建造物です。

☕ チョット一息

●8,000石ってどの位の金額になるかわかりますか？
1石は150kgです。なので8,000石だと1,200,000kgになります。
現在30kg(玄米)当り約9,000円で販売されていますので、120万kg(1,200t)では約3億6千万円になります。この位の財産を家臣に与えたことになります。

●8,000石ってどの位の作付面積になるかわかりますか？
水稻の1,000㎡当りの収穫量のことを反収といいます。現在では約540kgが平均反収となるようですが、幕末頃の反収は180kg程度のようなので、これを基に計算してみると、6,667反となります。1,000㎡=1反、10反=1町歩=1haとなりますので、6,667反は666.7haです。東京ドームにの敷地面積が約4.7haなので、東京ドーム142個分の大きさになります。(正方形だと215m×215m=4.6ha)
※伊達邦教君は29歳という若さで亡くなりました。家臣に多くの土地を配分してしまっただけで、主家が困窮する事態になりました。家臣は配分を受けた農地の一部を出し合って、主家へ献地しています。

< 連続テレビ小説情報 > R3.5.17(月)~
NHK連続テレビ小説
「おかえりモネ」放映が開始されます。

次号の告知

次号は「高倉勝子美術館編」で、今年7月に発行予定です。

高倉勝子氏は登米町出身の日本画家ですが、学校で美術の先生として勤務していました。勝子氏は広島で被爆体験をしています。体験をもとにして制作した作品もあります。

この機会に、どうぞご覧下さい。

編集後記

今回の「資料館だより」は登米町伝統芸能伝承館(森舞台)をテーマとして編集をしました。

「森舞台」の名付け親は元宮城県知事の浅野史郎氏です。森の中に佇む能舞台をイメージして名付けていただいたようです。

紙面の都合で、京都「西本願寺北能舞台」を参考にしたりや舞台下の「甕」について、説明できませんでしたが、次回のお楽しみといたします。
録田



“みやぎの明治村”SNS 随時更新中です！